TOYO BUNKO LIBRARY
東洋文庫蔵書

繪本通俗三國志六篇巻之四

目録

明治十年交換

秦宓張温大論天
曹丕返二龍舟一伐呉
孔明與呉征南蛮

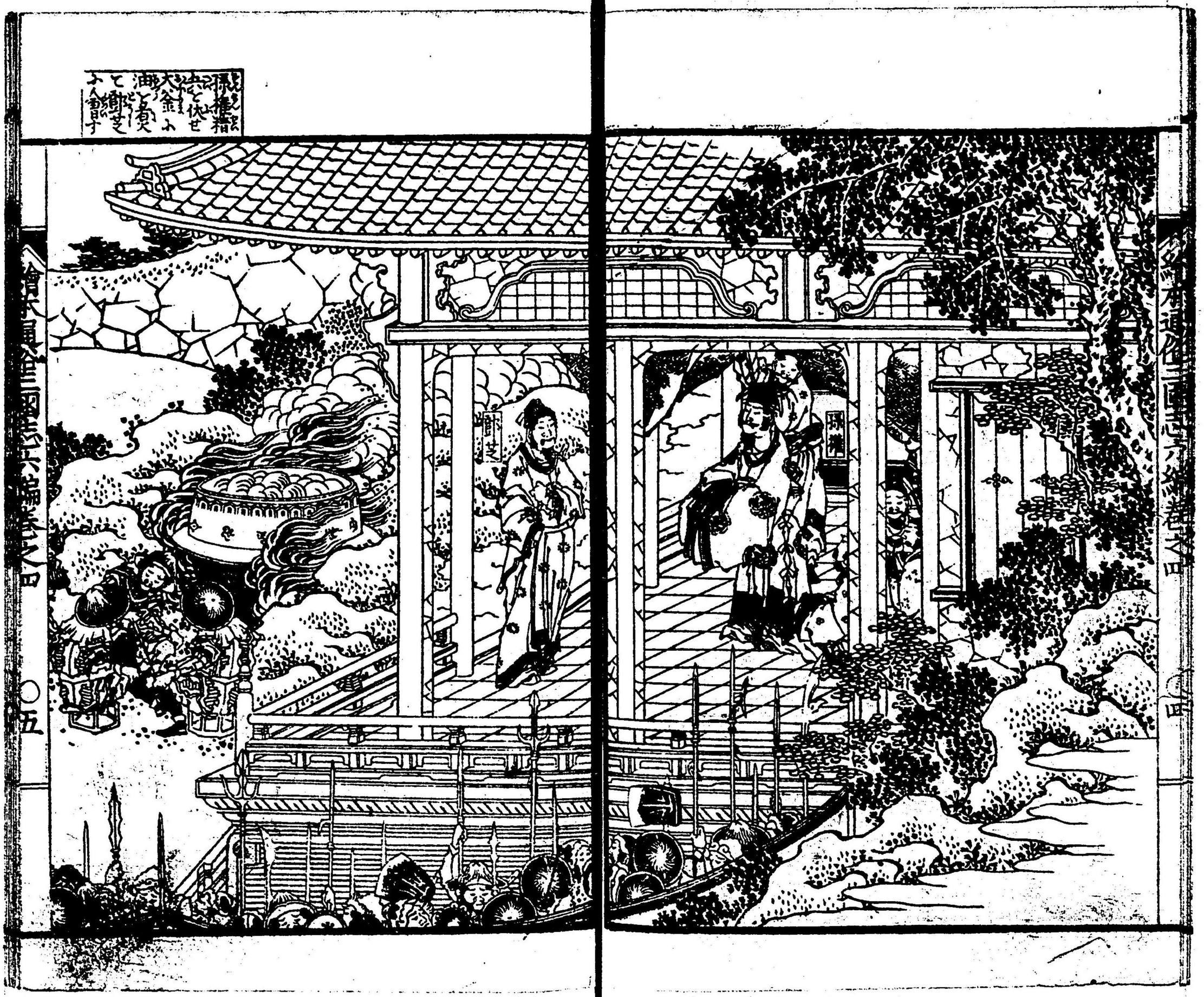
秦宓張蘊大論天

大のとゝ。吳の國へ陸遜が蜀の大軍を燒破り。魏の勢を退けたる功をもつて。輔國將軍江陵侯に封じて。刺史の牧を領ぜしむ。とゝ。張昭顧雍ホ相議し宜く改元あるべしと。黃武元年とあらたむ。大のとゝ。魏の曹丕五路の兵を起し。蜀を伐んとて。先吳の國へ使を遣しけるに。孫權よびゝて對面とゝ。使をけるゝ。魏さゝれる兵を起して。吳を襲んとせし。蜀主玄德が利害を說て救を求しゝ。因てあり。今おれを悔まんでも及ばじ。大のゝ人。五路の大軍を起して。蜀を滅さんと。若吳の勢を起して。とゝ。川口より攻るべし必ず。蜀乃地

を二分して相保ち長く好を結ぶべし。孫權大に喜び心決せざる。張昭顧雍ホと議しけれども張昭が曰く。今陸遜きたりて計あり。召て問ふべしと。孫權陸遜を召て問ふ。陸遜答て曰く。曹丕魏の國を雄據して。坐ら中國を鎮むるべ。急ふべ。圖難らん。今又その命を背ひて。兵を起さば。必ず仇を結ぶべし。臣計ふに吳の國と。魏の國と共に賢才多しと。せども。孔明が計に及ぶべからず。今まだ勉て。曹丕が求に從ひ。軍馬を揃て。蜀に向ふ。体をうえ。せひそうに。四路の寄手の勝負を伺ひ。若弓の勢打負て。國もとでも危き時。其大軍を引て。きうくに攻入り。早く成都を乘取べし。若四路の寄手。打負あべ。味方あつて兵を動さじ。されば曹丕が求に逆ば。二分に。蜀の怨をむすべど。深く上策とすべし。孫權大に從ひ。日を択んで蜀を攻んとて。魏の使を回し。ひそかに人を遣して。四路の勝負を伺ひ。きうむりに。遼東の勢へ西平関に出て。馬超を招て。引退き。南蛮の勢へ四郡を攻げるが。魏延に疑兵の計を用ひられて。尽く逃回り。上庸の孟達へ。俄に病を受て。半途より引回し。曹真へ陽平関に出て。要害を。趙雲に占られて。二人も進むこと克ず。斜谷に陣を取けるが。卒に打負て退きたりと。報じければ。孫權大に怒て。文武の臣とあつまりて曰く。陸遜が言まことの神算なり。三路の兵ともに。又蜀の怨を結ぶべし。近臣皆曰く。蜀の國より。鄧芝とらんの使たり。張昭が曰く。ぞんじ

孔明が兵を退るの計なり。鄧芝を使として。説客たらしむるの人。孫権問て曰く。いかなる答をか。張昭が曰く。殿の前なる大なる鼎を居て百斤の油を貯へて。よく〳〵炭火を挽して沸し。強く壮んなる武士千余人を択んで。手どゝ力を持せ。宮門の前より直に殿前まで排列し。其後鄧芝を呼び。彼がいふ口を聞くを見て。説客をあさべ。昔し酈食其が斉を説たる例あるゆへ。烹殺さんと云へ。孫権これに従ひ。大なる鼎に油を沸し。千余人を左右に立て。鄧芝を招入れ。鄧芝衣冠を整へて。宮門に到り。左右の武士手どゝ力を提げ。大なる斧を持長き戟を横へて。威風凛々たるを見て。已に早くその意を暁り。全く怕る〳〵色なく。昂然として殿前に到り。鼎に油を沸せるを見て。莞爾笑ひて進む。鄧芝長揖して拝せざりけれ。近臣怒て。吳主に云へ〳〵。汝い何ぞのあれを孤。孫権簾を捲せ出て。鄧芝昂然として答て曰く。上国の勅使を。小邦の主として拝せざる。孫権いよ〳〵怒て曰く。汝三寸の舌を掉て。酈食其が斉を説し例に效んとなるか。汝たとひ古の隨何陸賈が再び生まとるとも。安んぞ。弁ありとも安んぞ。動かすを得ん。汝早くこの鼎に入るべし。鄧芝あざわらひて。いはく。人をかの吳の國に。豪傑多しといふ。何ぞ計人一人の儒者を。かの程に怕るんとへ。孫権いはく。孤何ぞ汝ごとき一匹夫を怕るんや。鄧芝が曰く。已に来るを怕るとぞ。何ぞ

まづ来り説とて愁る。孫権が曰く。汝孔明を殺て説客となり。
まことを説て。魏と交を絶せ。却て罵と好を結ばしめん為に有
だでや。鄧芝が曰く。まことに乃ち罵中の儒者なり。吳の國の利害
の為に来れり。何ゆへに武具を列ね。鼓を設けて。一人の使を拒
んとするぞ。あなどる気量のなきを容と克ざる。孫権あきれて
左右の武士を追退け。殿上に請て坐を賜ひ。吳魏の利害先生
ねがはくは。あたらかに教よといひければ。鄧芝が曰く。大王のんへ。
好を罵に結ばんとおもひたまふか。魏に結ばんとおもひたまふか。孫
権が曰く。まことに蜀と。好を結ばんことを願ふ。但恐へ後主乃始
終を全くすること克ざらんことを。鄧芝が曰く。大王なぜかち命
世の英賢孔明も亦一時の豪傑蜀に山川の險あり。吳に三江乃
固あり。此共に好を結んで唇齒となるべし。進で天下を并
べ。退て鼎足に立べし。今大王身を屈して。魏に臣と
称せば。魏ゆるさば。その朝覲を望む。東宮太子を求て内侍とし。
人質を取んとすべし。若その命に従ひたまへば。詔を受く。
攻来り。蜀の勢も流に乗じて大に進む。此のごとくして吳の
國安穩ならんか。おのれ大王に若大王某が言を聞たまふ
ごとき。能おのれを用ひたまふ。某いま大王の前に死して。
説客の名を絶んとす。殿上を走り下り。階に乗じて。
孫権いそぎ。侍臣に命じて止め。後堂に入て。酒宴を設
け。上賓の礼をもて敬ひ。先生の言よく。まづ意に合り。孫
ぶくるに蜀と好をむすぶべし。先生さへのりて。後主に告て長


孫權猶豫決と伏せ
大釜ふ
油と煮て
と鄭芝
ふ人言す
孫權
鄭芝

く唇歯となるらしめよと云けるとぞ。鄧芝が曰く。今某を京兆殺さんとおもへども大王なり。又某を用ひて好を結んと志すゆへ大王なり。大王なる故疑しく。決せざるんぞ。何をもつて信天下を取ん孫権が曰く。すぐんの中明らかなるぞ。先生幸なる教なり。鄧芝を十日あゆむなり。宮中みなぐわ誘の官人をあつめてとどけるゆへ孤江南八十一郡荆楚九郡の地を保つ。天下を西蜀かと田舎の國を及ぼさん。蜀を鄧芝あり。君命を辱しめざる。呉の國をすぐ使となりて。蜀を行よく好を進をべき人也。諸人をもつて言をきいて言を生ずるものなり。忽ち一人をもつて生ずるものなり。忽ち一人をもつて生ずるものなり。諸人をもつて使をくるべし。呼入れ孫権が曰く。おそらくは汝蜀の國を入り孔明をあつめて孤意を達せるを能まず。張蘊が曰く大王なるをもつて自その志を失ひ人る孔明真を當世の英雄なるべ臣亦今の世乃人傑なり。聖人もいそをや。舜も人なり。我も亦人なりと臣あんぞ。孔明を怕るんぞ。古の大舜も。故なく効ひ及ぶべし。いかんや況や。今の人をや。孫権なるを張蘊を使と聞て。卒を鄧芝と蜀を入りて孔明と連和の事を調ゝむ此と孔明い鄧芝が日を経て回らざるをもつて。後主を見て奏して曰く。鄧芝行てより已に十日余りをおもり必ずるを調べし。呉の國を賢才多し。陛下よく。禮貌を厳をしてをもつて敬ひをその威徳

の盛なるをいとせしかども。呉蜀の好をむすびたへ魏の勢あ
へて境を犯さじ。臣その隙に兵を起して。南蛮國を攻平げ。
後の禍を除て。その後に魏を伐ん魏滅るときは呉は自ら
服すべし。志うるときは漢の天下再び興らん時に外より兼
ねて呉の孫権に。張蘊を使とし。鄧芝と蜀に入て回礼せ
むと。告けるべ後主をあぐ。文武の臣を丹墀にあつめ鄧芝
に命じて。張蘊をむかへさせ。張蘊みだりに志を得て昂
然として。殿に上りけるべ。後主礼を施し。殿の左に坐をたま
ひ。酒宴を設て。おのく持る。酒宴とでるけるべ。百官を赤
張蘊を客屋に送て休しむ。次の日孔明。酒宴を設けて
おしけるべ。張蘊をだりに傲りに放にして。蜀の人物をとるに及
もののちじとおのく傍若無人なる体をあせども孔明いよ〳〵重
敬ひ酒半ばに。先帝をくらわ呉と不和なりしを
が。今をでに朋御志をひめ近比主上室位を即ん深呉
王の德を慕て志しく對面せざるを恨ん孫権を太
夫國に回て善言をのべて呉王に奏し長く好をむすんで
とのみ魏の賊に平げ万年の計をなす人と云けるべ張蘊
目を斜にして。孔明を望て談笑を旧のごとく次の日後主金帛
を張蘊に賜ひけるべ孔明百官と共に錦の類を餞し城南
の亭上に酒宴を設ていんぎんに別をおしむ忽ち一人酔に
乗じて座中に入けるべ張蘊怒る色ありそのへ昂然として
て長揖して憚もなく上座に着けるべ張蘊を呼びたく孔明

と問てやはらへ是いかなるものぞと孔明が曰くこれ孟子
の学士なり秦宓字は子勅とのたまへり張蘊あざ笑ひていは
く名は学士とり人ども未だ胸中の学なしと志らざる秦宓
色を正しくして曰くすべて蜀の國は三尺の童子もまた学
問を況んや我をや張蘊が曰く汝ちかごろ学び得たる秦
宓が曰く上は天文を窮め下は地理を至り三教九流諸子
百家古今の興廃聖賢の經傳
をことごとく通ぜずしいかでか古今の興廃聖賢の經傳
を見たりといふ汝ちかごろ学問をなすと問へるをもて軽
んだる張蘊笑ひて曰く汝ちかごろ廣言を放つ先天の
事を問んに天の頭ありや秦宓答て曰く頭あり張蘊が曰く
頭何の色ぞや秦宓が曰く西方にあり詩に曰く乃眷西顧

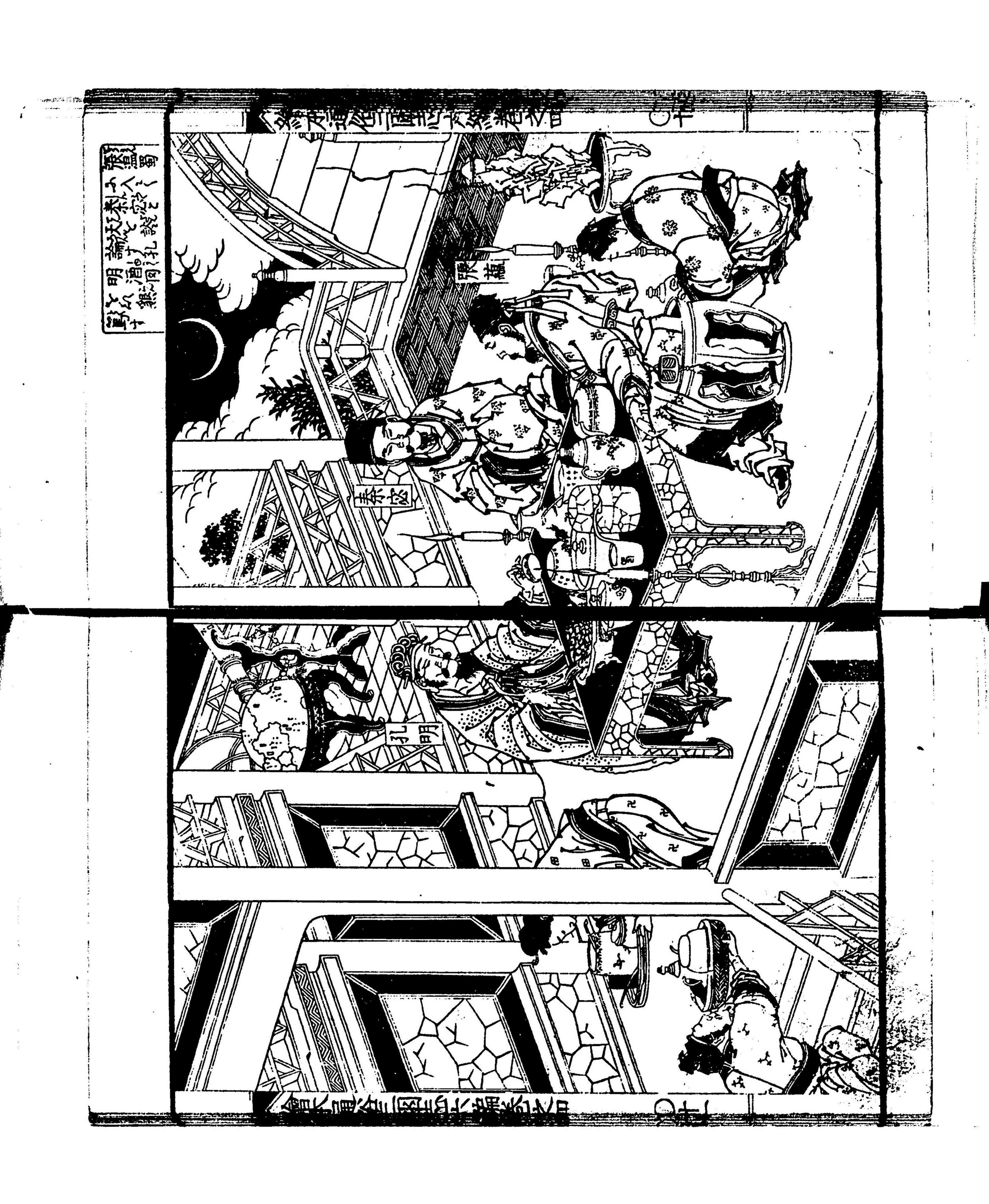
とあるをもつて推しはかるに頭は西にあり張蘊問て曰
く天に耳ありや秦宓答て曰く天は聾高而聴卑詩に曰く
鶴鳴九皐聲聞于天と耳なくんば何ぞ聞かん張蘊問
て曰く天に足ありや秦宓答て曰くあり詩に曰く天步艱
難と足なくんば何をもつて歩む張蘊問て曰く天に姓あり
や秦宓答て曰く安んぞ姓なかるべき張蘊が曰くなんの姓ぞ
秦宓が曰く姓は劉なり張蘊が曰くなにをもつてしるか秦宓が
曰く天子姓は劉なるをもつて志る張蘊問て曰く日は東に
生ずるか秦宓が曰く東に生ずれども西に沒ずとあるがごとし
秦宓が詞滔々として水の流るるが如くなりけるに滿坐皆
大におどろき張蘊も口を閉て茫然として居たりける時に秦

宓問て曰く。先生は吳の國の名士なれども天の事をも問て某も問ふ。ちらだよく天の理を明やを人るあらん。昔混沌なれども分ち陰陽なれども定まりて軽くして清るものは上り浮んで天となり。重くして濁るものは下り凝て地となる。共工氏の戰ひ破るゝ怒りて頭を觸て不周山を觸天柱折け地維缺天は西北を傾き地は東南を陷入り天なれども軽清で上り浮べるものなれば何ぞ西北を傾らん且軽清る外へ出て去るものぞ。願くは先生去るを教へ張蘊去るを請て酒を醉なるがごとく又愚癡あるが如く答べき詞なくして席をさけて意ざりき。罵中を多く俊才を生さんとは今高論をきゝて某が茅塞をひらくと云けるとぞ孔明その愧んを白善言をとりて慰め席間の問答おはる。時の戲なり。足下深く國家を安んぜるの道を志すのみ。ちんぞ居を弄ぶの戲談あらんと云けるとぞ張蘊拜して去るを謝す。孔明又鄧芝を使として張蘊と吳へ赴き礼せしめけるとぞ張蘊國へ回りて。まづ吳主孫權へ備へ後主と孔明が德を稱し長く好をむすぶを為り又鄧芝を使たらしむと告けるとぞ。孫權大へ喜び酒宴を設て。鄧芝をもてなす。若吳と蜀と心を同して魏を滅さば必ず天下の太平を得んと。ふかくとなへ天下を平分して。とこしへ百姓を治やんあるを樂ざらんやといひれば鄧芝辭して應ずて答て曰く。天に二つの日なく民に二りの王なし。若魏

を滅ぼして後に大王天命の歴さる不と。誰ちらんとも
ひとり人る。但君こるひと其德を修め臣たることの其忠を尽
さべ自ら合戦休んまうらだとんで何ぞ樂むとあらん孫
権笑ひて曰く君乃ち誠実の士なり。蜀を治る賢才乃
へあり。まさに安んぜ安き境を侵さざ。但願ぐくは。
く。好を結ぼんとて。鄧芝をあひく。金帛をあまへ送て蜀
を回らしめけるべ。これより呉と蜀と。好をむとんで長く唇
歯の國となりけり。

曹丕次龍舟伐呉

蜀の後主劉禪。呉の孫権と好をむとび。共を力を合せこ。
魏を伐んとする由きこんけるべ。魏主曹丕大いを怒りて人を先
てせられざるとなべ必ず味方を利あり志ば朕ぐ呉を
伐んとて。文武の臣をあつめて。計を議さまのとて大司馬
曹仁大尉賈詡二人とをる。病を受て亡びべ命じて厚
葬らしめ。百官をむかへ近比呉の孫権罵の劉
禪と。好をむとび。使者を通ぶて唇歯の約を堅をるる
ぞ。兵を起して。都を侵さべし。朕まづ呉を平げて。次を蜀を
破らんとおもへ汝ホいかる計うある。侍中辛毘ここ生
て曰く天下あらんを定りて。地を廣くとん人ども。民を少く然
るを。又大軍を興して。呉を伐るるんを甚あり。宜うるは志
じよく兵を養て。十年あまり。屯田をして食を足し。兵を足
て。そのちを攻るべ。呉蜀なのべらら破るべ。曹丕怒てける


孔明論天下英雄人物之處
張飛
關羽
劉玄德

へ。ちなみに府内儒者の論ちなみに今吳と蜀と好をむすんで已に久
都を攻んとす。ちなみの暇ありて十年を待んやとて。即時
に兵を催しけるに司馬仲達申けるは。吳の國は長江乃
險阻を保ちて船なくんば攻がたし。陸下ちからを征伐を急
大小の兵船を揃て。蔡瀨より淮水に入り壽春に出て。廣陵
に至り。江口を渡りて。直に南徐へ攻入る。曹丕さもさぶらへ
夜を日に継で龍舟十余艘を作らせ長さ九余丈にして二千
余人を乘べし。その外の兵船三千余艘不日に作り出すべし
魏の黄初五年。秋八月曹真を前部先鋒として張遼張郃文
聘徐晃を大將として先手に備へ許褚呂虔を中軍の護衛
として都合その勢三十余万日を択んで打立仲達を尚書
僕射に封じ都に留て。國の政を行ひ給ふの由をきき吳の國
にもきこえけるに孫權おどろき文武をあつめて。計をとり議を
るに顧雍を召出て曰く。今蜀と好をむすび上へ向そぎ魏
簡を送り。孔明に兵を起して長安を攻らせ又大將をえ
らんで。南徐の要害を守らしめる人孫權が曰く。その事陸
遜にあらずんば叶まじ顧雍が曰く。陸遜今荆州を守りて
北國の大敵を拒ぐ。陸遜をやり返すべつぐ夏侯尚が勢
時を得て。攻入荆州。破るべし。孫權が曰く。孤これを
あらざるにあらず。如何せん眼前力を尽くして救まへ
はしとて人を遣して出て曰く。大王いかれたる群臣を軽んじ
ぞ。臣に任ずべきを。一軍を領して魏の勢を拒ぎ曹丕を江を渡

らべ必ず生取て献らん。り江を渡らざらんを。魏の勢ひと太半へ打殺さんとの言も相違せば九族を誅して罪なき人へ諸人おどろひて是をうれむ乃ち琅琊莒縣の人徐盛文響なり。孫権喜んでけるへ若汝が江南を守るあらば。うれとあらんの憂あらんとて。遂に徐盛を。安東将軍に封じて。建業南徐の軍馬に。都督として。徐盛恩を謝して即時に。諸将を建業へあつめ。手分を定めて。下知をなしけるに諸人とも許容して。ありぞきけるに一人昂然として下知に従ぐるとのあり。徐盛とをとへば乃ち呉主の姪に。揚威将軍孫韶字へ八礼なり。幼少なり極めて。謄量ありけるに。今日きらに。徐盛が下知に進出てけるへ今日大王将軍を。都督に封じて。魏の勢を破り。曹丕を擒にせんとなり。人。将軍なんぞ。早く軍馬を揃へ。江北に渡り。淮南の地へ出て。敵をむかへうとの。今も江南の岸を守りて敵の来るを待べ。魏の大軍一度に来りて。味方拒ぐべきようなく。國中の人民震動せん。徐盛が曰く。曹丕勢ひ大にして。殊に名将と先手とて味方江を渡りてたゝかへば安んぞ。彼が勢ひに敵せん。我江南の岸を守り。江北の岸にあつまりて敵を待べ。別うして破るべし。孫韶が曰く。我が手下に二千余騎の兵あり。殊に先年。廣陵を守りて。その辺の地利を。ことごとくよく。雄を決せんとの勝ばかりくを江北へ渡りて。曹丕とかろよく。雄を決せんとの勝おとんべるが首を刎ねん。徐盛再三許容せざりけるに孫韶強

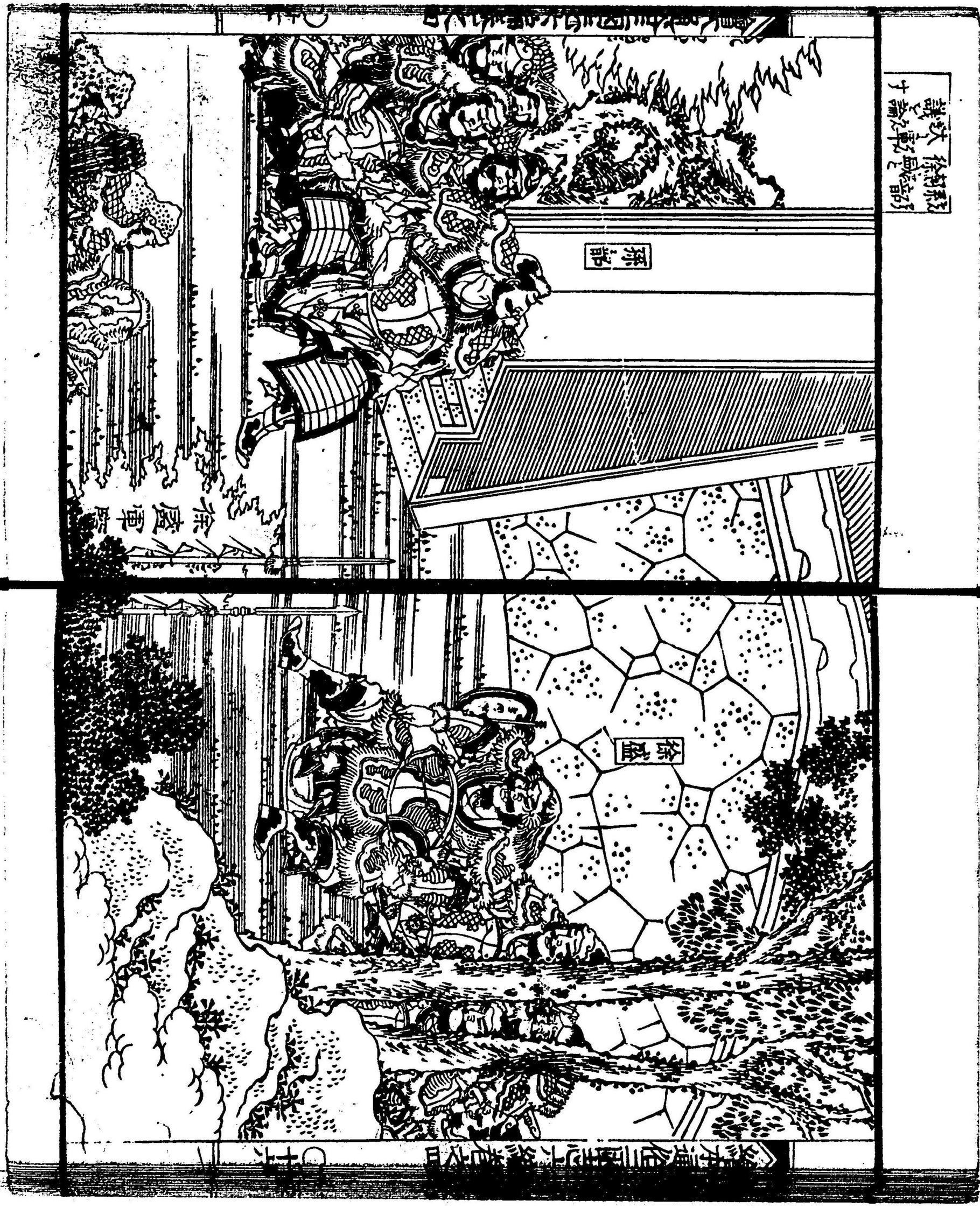
て望けるとべ徐盛怒りて曰く。汝今すぐ下知するいとべ我も
しかるとて閣るべあるとのりて諸將を服せんとて武士を命じ
て首を斬といへ武士ども孫韶を引て轅門の外へ推出し
けるが吳主の姪なるとべ若きとて人もあらんとて輕くき
らざりけるとべ孫韶が手下の大將いそぎまへの由を吳主へ報ず。
孫權おどろき馬を乘しいそせ來り武士を止りでけて孫韶を
救ひけるとべ孫韶哭ひてやけるへ臣昔年廣陵にありて深く
地の利を志るり早く打向て曹丕を破らざんべ曹丕兵船
を列ねて長江を下り國中不日に破るべし孫權をおち伴て
陣中へ入りけれべ徐盛とて色を止めてけるへ大王
さとでは臣を封じて大都督と志のへ今揚威將軍孫韶軍

法に志たがひ是故に首を斬て法を正す大王へるるるべ赦
を入る孫權が曰く孫韶年若して血氣の勇に儀くまへのめ人
に軍中の令を背く孫權幸ひに罪を宥す徐盛が曰く
それ軍中の法度べ臣が立るるるとべ大王の立るる
にもあらざる乃ち國家の典刑なり親をもいはるるとて怨
疎とのりて殺さべ公論とのりべきや孫權が曰く汝の子り
宗室にあらざんで將軍のんの仮に任とべしるるとべん
で。救へとて得んいらざせんべ孫伯海が志とべ姪にて
少しとて父を失ひ伯海が為に類へるもと俞氏の子なりしが
孫兄志とを愛してそれを姓を孫とあらたむ今もしるるとを
殺さべ兄の義に背き又俞氏の後を絶にいるる是とて

る せ。徐盛が曰く。臣已に を得たり。大王の龍顔に對して。死罪を宥め。孫権 ことごとく喜び。孫韶に命じて。徐盛と拜謝せよとのに。孫韶昂然として。拜せざりければ。徐盛問てやけるに。汝いま我が服さや。孫韶声を励まして曰く。なが計とへひとへに兵を用ひたりて。曹丕を破り。戦場に命を棄てんとをわれと何ぞ汝ぞ。儒弱なる計に服せん。徐盛怒て色を変じければ。孫権きこうに孫韶をいましめて。追退けて。徐盛を顧てやけるに。今まの者を用ひたりとも。事の欠べきを更に。今より後も再び用るとなられとて。馬に乗てで回りけるその夜人来り。孫韶手下の勢三千余騎を引てひそかに江を渡るりと。告げるに。徐盛心の内怒りけれども。吳主孫権の再三請受て救に入るるを無

体に殺さべき様なしとて。丁奉に よくく計をを授けて三千余騎を引て救へむ。去程に曹丕ぶ大軍兵船を列べ巳に廣陵まで来り。先手の大将曹真大江の岸に船を列べ張れば曹丕まべ敵のようを問しむるに曹真答て曰く。遠く向乃岸を望これに敵一人もえぞ。又立たる旗もなし。曹丕ぶ曰く。されらのらだ詐の計なるん。朕ぞらに其虚実をえんとて。龍舟を放て大江の上に浮べ岸に泛く。龍鳳日月五色の旗を建白旄黄鉞を列て。その光目にかゝやき。柄の曲たる黄羅の蓋をさゝげて曹丕自ら舟端に立出るかに江南の岸を望に敵一人もえざりしべ劉曄蔣濟を顧て。けるに今敵の用心なる体もえを直に兵船を同の岸に

寄て。一同に攻上んいふに劉曄が白兵法に実々虚々鬼神莫測と。い
り。軽々く渡りあるべしとあらば。今味方の大軍さへのわまで攻き
たる。彼ちんを備を。おさぐらん。今陛下造次の事を行はば。
四五日が程その気色を伺へて。その後に先手の勢をひかせ。
渡しうべ。曹丕が曰く。さる事真に朕が意に合へりとて。江北の岸
に沿て船を車。孫権の夜月も黒うりしうべ。数千の船に燈
火を焼て光天地に輝よ。あたりも白日のごとくなる。江南乃
岸に火の光もさらに人をそ。人ありとも。こゝざりけるべ。三更
の比に。いと汗侯の兵をせ回り。呉の国乃人民を。陛下の大
軍の魂を失ひ行方ちらくれて。一人も残り留るものなしと。
告けるこそ曹丕をあへど喜び笑ひて居たりける。已にその夜も
明方に及んで。朝霧深く立あちひ。咫尺の内もこゝざりしが。
日上り。風吹て。霧晴雲収りけるべ。遥に江南の方を望
に。岸の上に数百里が間。城をきづけ。矢倉の上に色々の旗
を挟さゝ。戈を建。鎗を列ねて。光日にかゝやいてこゝけるこそ曹
丕。大におどろひて。あれへ如何と怪む。ある追々人来り南徐
より。江に沿て。直に石頭城まで。数百里があひだに城郭を
構へ。連々として絶ず。只一夜の内に成就せりと。報ずければ。
魏の勢。こゝ騰て冷し。矢倉の上壁の陰に弓箭兵杖を携へ
たる軍勢さき間もなく。双居とゝべ愕きおそれとのゝかせ
はべるに元来徐盛が計に。勇てすり。用意し。月黒く霧深き
夜を相待一夜の内に。詐の城郭を構へ。草を束ねて青き衣をき


徐福求仙
漢武
帝と
方士
風伯
雨師

せ。武具を持せて立双ところに。曹丕よくく[illegible]を[illegible]て。長嘯して。けるへ。[illegible]手下の。数千の大将あるとても。皆用ゐるゐたらで。呉の国の人物ゆくのごとく。未だきこゑる。破るとて克ドとて。人の内疑ひをおこす。忽然として。大風吹起り。白波天をうつて。江水曹丕が衣を浹し。虚空を動揺して。舟をとゞめ覆へらんとせけるとき。文聘いそぎ小舟を推来り。曹丕をさそひ乗んとするゐ波あらく。舟ゆらゆる飛揚して。人々を起上るまとて。得ざりけるとき。文聘龍舟の上ゐとび乗曹丕を買て。小舟ゐのり移り。湊の内ゐ入けるとゐ早馬急て告て。呉の大将趙雲陽平関より出て。長安を攻ると報ずければ曹丕色を失ひ急ぎ軍を収て都ゐ回れと。下知をるゐ呉の勢鼓を打喊を造りて。攻来る。曹丕諸大将ゐ命ず。兵粮武具をとゞく〳〵打棄て。龍舟を。淮水の中ゐ入るとゐ。俄ゐ喊の声ひびきて。一彪の軍馬討て出呉の大将孫韶まけとゐ馬をとゞめしてきんぐゐ蒐たりけるとき。魏の勢おどろかたるゐ大ゐ乱るとて。大半ゐ討るとゐ溺死をるもの数を知らず。諸将も命をとてくるくゐ囲を出て。淮河を渡るゐ行て。北里ばかりゐして。芦葭の。おひたりる中より。火ゐ出もとより魚の油をそゝぎかければ。焔風ゐおこりて。盛ゐ黒烟天地を掩ひ。龍舟大りして。通るべき。なりしらべ曹丕きゐ小舟ゐ乗移りゆく。岸ゐ近付ければ。龍舟をゐ火くりゐ曹丕おそれ愕き馬ゐの。ひて走らんとするとき。岸の上より呉の勢喊をどゝと造り大将

丁奉勢ひゐの付て攻かゝる張遼事の急なるを見て。馬を拍て大こうへんとなを呼び丁奉弓を取て。兵と射るその矢張遼が腰を當り已を馬より落んとなる。徐晃きうを来り救ひ曹丕を扶けて。都を廻りければ。魏の勢殘少を討おさる孫韶丁奉へ廻る敵を追ろけ。路をとゝてたる馬物の具。兵粮武具兵船をへさるまで根ちゐく拾ひあゐ江を渡て回りければ。徐盛へ大ちる功を立て重く封賞を被りけり。魏主曹丕へ帰り都を廻上り士卒大半討ゐたれべんの内安らゝざるを大將張遼が腰を射るとる矢疮重して。卒を苦痛して死ければ哀し哭ひてあゐく葬り。再び兵を集て。蜀の敵を拒んとなを。呉の大將趙雲をでを長安へ攻めりゝが南蛮の勢呉の四郡を攻るゆ人孔明檄文をたゝせて。呼返したりと。告けるべへよく要害を守の勢をを人境を保ゐてあんて動ざ

孔明興兵征南蛮

蜀の建興三年の春孔明成都をありて。後主を扶け國の政事を治めけるべ両川の民ゐ。その德を懐て夜も門戸を閉ざ路を遺たるものあるども拾ゐ去幸を打続き豊年ありしるべ老幼腹を鼓てうたゐ樂む凡を徭賦を差して工役あるとをへ先をあらそゐて弁んとて務ゐ是をうて馬物具兵粮ホを至まで備らをとゐを時を益ゐ早馬きたり南蛮國の王孟獲十万の勢を起して堺を犯しるを建寧の太守雍闓謀反して孟獲を與を拝柯郡の太

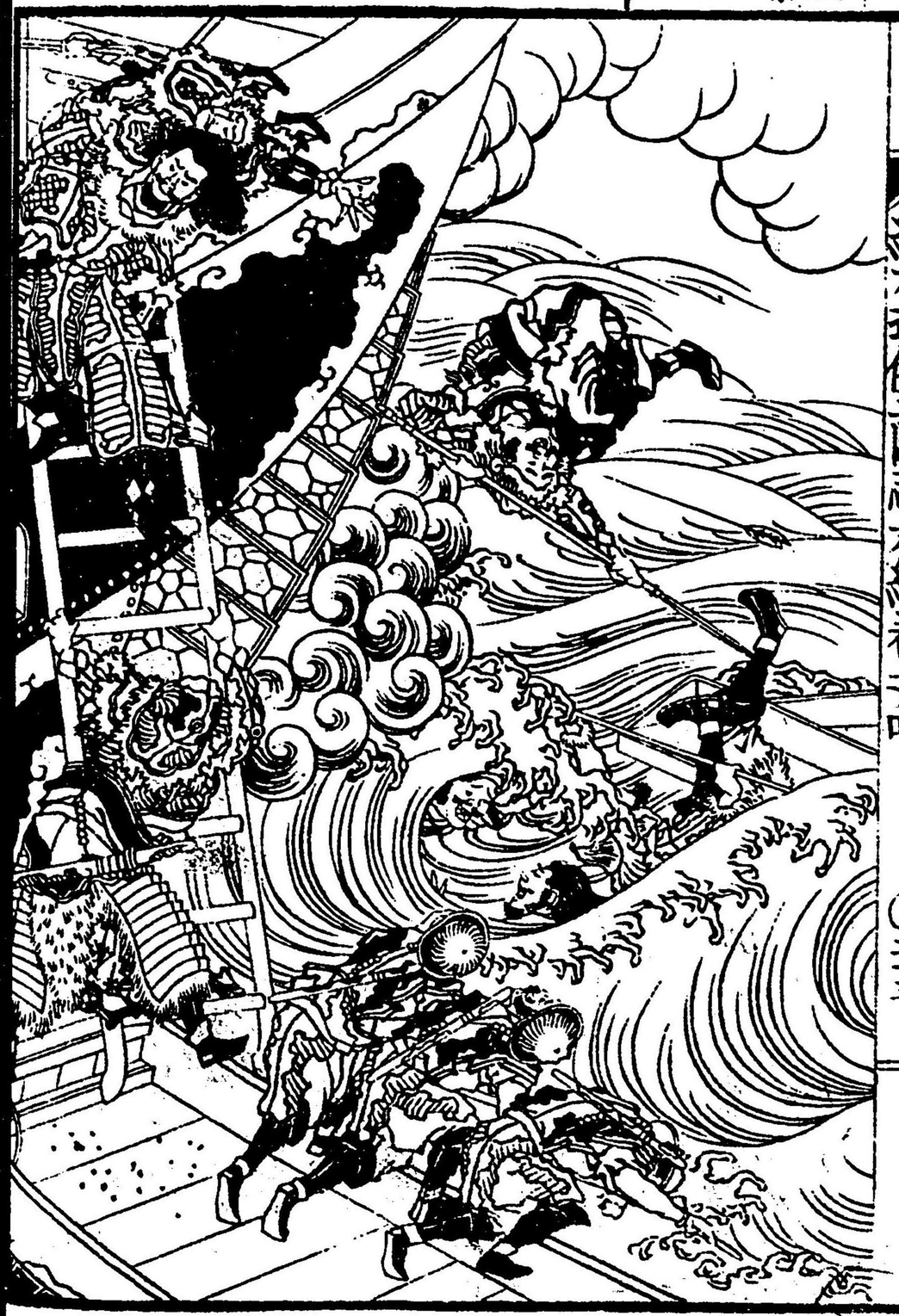
守朱褒越巂郡の太守高定二人もおのおのと合せたるを永昌郡の太守王伉一人は忠義を守りて去らざるを疑ふ因て南蛮の大勢永昌郡を攻ることをおぶ急なり今王伉百姓をあつめて城を守り功曹呂凱と命をともにして敵を拒ぐ討手の勢が延引するをよびたのべ事うるるぞ大事なりと告げれば孔明いそぎ朝に出て奏して曰く臣久しく南蛮の様を考るに其内国家の大なる患なり今雍闓木子孟獲と内應して四郡を乱るるの雍闓は漢の雍齒が苗裔にて武略の勝れたるものなれば害をおさんに臣ぞ自ら大軍を率て行てこれを平ぐべし後主劉禪宣ひけるは東は吳の孫権北は魏の曹丕虚に乗て攻入んと伺ふ今丞相朕を棄て遠く南蛮の地におもむき吳魏より兵を起して攻来らばいかゞして拒ぐべき孔明ぞ曰く臣とぞ計を定め置り今吳の孫権とは好をむすび上へ争ふ逆意を存ぜざる殊に太子嚴を以て帝城に置とれば内の人の智謀吳の陸遜をも拒ぐべし和乃曹丕はあらたに吳の兵に破られ気力を落して都に回る安んぞ遠計あらんや殊に馬超は漢中の要害を守らせ置とれば是又ちからの憂ひなし臣又関羽張飛に二手の勢をかけて何方にても危き和を救ふ力は一も失はざるべし陛下御心を安らかにおもへ臣南蛮を平げて後の憂を絶のぞきそのうち魏を滅して先帝三顧の恩を報ぜん後主宣ひけるは朕年弱して大事をまかせ丞相よろしくこれを義

せよと先づ一人をこゝに生無用くとよびけるこゝ誘人をもて
えの諫議大夫王連字は文儀ちう孔明いちの故ぞと
問ふ王連諫て曰く南蛮は不毛瘴疫の地丞相國家の重
任を司どりて何ぞ遠く出て征伐ふの今雍闓小謀反を
とゝのせども喻べ癬疥の病のごと捨置とも何程の事を仕出
さん只一人の大將を命じて是を討しめう人自ら功をおこん
孔明が曰く南蛮の地は國をあゝて甚だ遠しくこゝを王化
の習ひ未だ平げんと甚だ難しまづ自ら征してある
へ劉ふ一のひは柔は時を應じて計を用べし輕〻他人を任
さゞきあらんあらざ王連再三諫むるとも孔明あへて聞かず
ぞ零陵郡の將琬字は公琰といふものを參軍とし江夏郡の
の人を費禕字は文偉といふものを長史とし董厥樊建の二
人を掾吏とし趙雲魏延を大將とし王平張翼を副將
とし其外の大將校十人軍勢五十余万益州をさして打
立ける關羽が二男關索といふもの馬をとゞめて来見る孔
明ふ是を見て涙を流しぬるよとおもひ今まで何ぞありしと問べ關索申ける
荆州又の破〻れ身深手を被りしべ鮑氏の家に隱れて
病に兼ひ先帝の吳を攻めんとて金瘡いまだ癒ずして
立て克たず今丞相の南蛮を征しのよと兼ひて馳き
ぬるよりて孔明ふ是をきいて嗟嘆して已ぬ朝廷に奏問
てやがて先手の大將として大軍の通るに秋毫も犯ることな

去程に建寧の太守雍闓に孔明ぶんぶんら向よてきく高定
朱褒とよんで計とを議し高定を中路にそる人雍闓左に
ありて朱褒と右に備とのに六万の勢を率し高定が大将に
永昌永平の鄂煥とて身の丈九尺あまりにして面に悪鬼の
怒るごとく常に方天戟を使て一方夫不當の勇ありける
て先陣の大将と本陣とをあれて蜀の勢をむうへしむ孔
明ぐ大軍をでに益州の堺りに入りて鄂煥ぐ勢と出合けれ
ば魏延まりまりに馬を出し反賊をやゝ降れとよばりける
鄂煥きてもあんだ戟を舞して荒りけるに魏延戦ひ二三
合にして詐りて引退く鄂煥勝に乗て追ひ来れば忽然
として喊の声おこりて張翼王平二手の勢殺到して引色
て三方より攻卒に鄂煥を擒にし本陣に回りて孔明ぐ前に
引出す孔明きこうにたの縄を解免し酒肉をあたへて持成
けるに鄂煥深くその恩を感じて孔明問て曰く汝は二人
の手下に属せるぞ鄂煥ぐ曰く某は高定ぐ手下の大将なり
孔明ぐ曰くすでにかとより高定は忠義の士なるを志る今雍
闓に欺きあまりて謀反に與す今汝を放して回らしむ
高定にその事を語りてとの味方に来る我うちらだ重
賞せん若延引にあらばいとまなくして鄂煥に
ろく恩を謝しくるぐ陣に回り高定に見て孔明ぐ徳をか
たり共に感嘆して居るわる雍闓ぐときこり如何に鄂煥
にあるとして無事に回りたると問に高定答て曰く孔明情あり

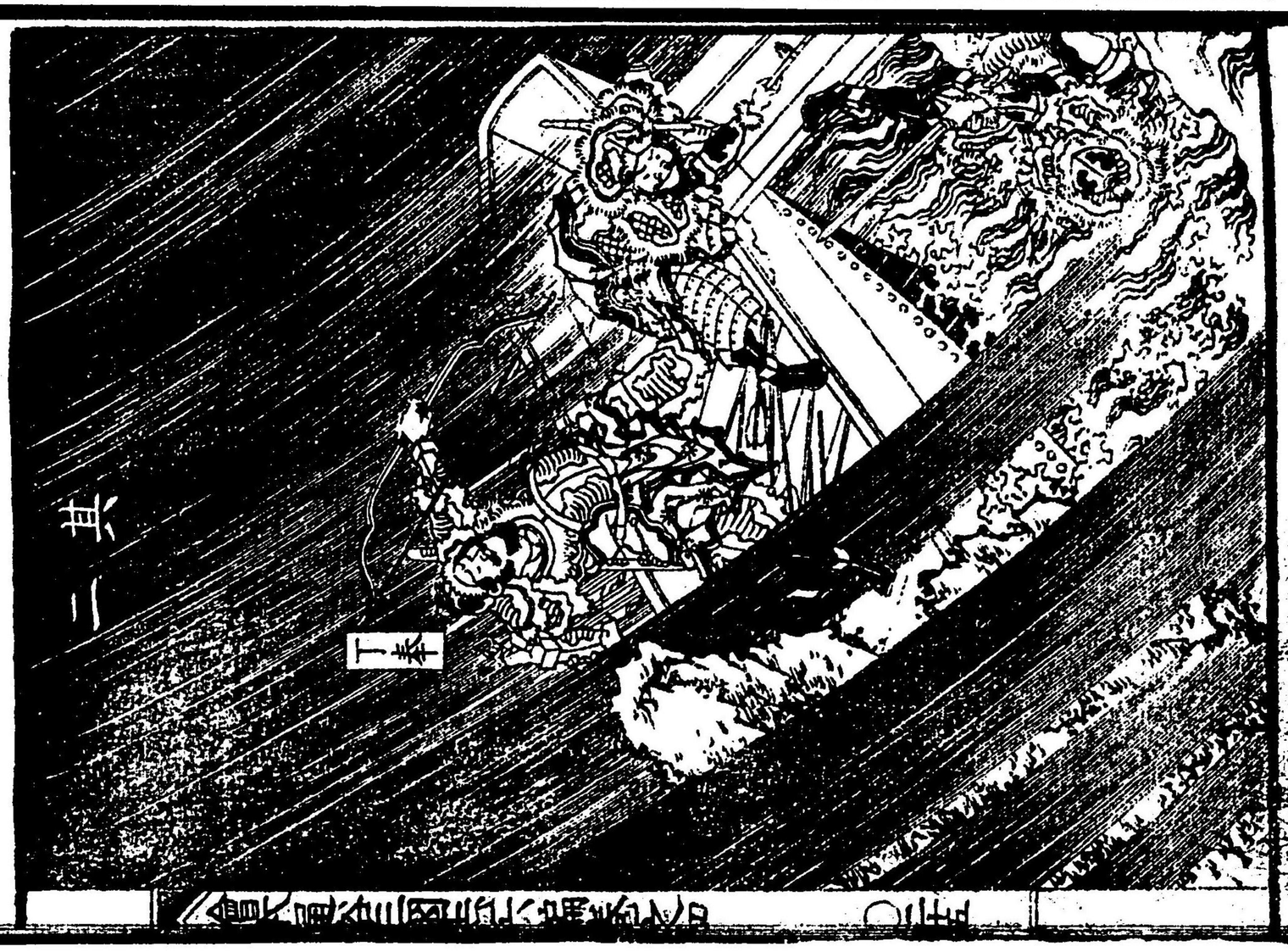
て放し生せり。雍闓が曰く。御辺達と。さらばや。と。孔明が反間の計なり。御辺と。ととと。不和なせん為なり。高定んいまだ決せざるを。蜀の大将魏延攻来るると告げるべ。雍闓ら。ひからの三万余騎を引て打むかひ共に陣勢をたければ魏延罵て曰く。恩を忘れ義を背の賊を安く降参せよ。雍闓大に怒り。馬を拍て鋒を交けるが叶はずして逃げれば魏延二十里あまり追殺す。次の日雍闓又兵を引て生ければ孔明うたく陣屋を守りて。三日があひだ戦へども第四日に及んで雍闓高定二人二手に分れて推寄けるべ孔明ら拒てすり。路の難所に勢を伏せおたさんぐに打破りて大半を擒にす。孔明をあち。諸将に計をさげけて雍闓が手下の生取と。高定が手下の生取とを。別の所に捕置ひそかに軍中に云傳へて。高定が手の者は放さるべし。雍闓が手のものは尽く殺さるべし。風説させけるべ。生取るとりのども。是をきいて。高定が手乃ものは喜び。雍闓が手乃ものは哀む。おのおのあり。孔明まで。雍闓が手乃ものを生させ。おのおの体にて。汝ら何人の手下に属せるぞと。問けるべ生取ども。若雍闓が手の者へと。あらばこそ云べしや。殺さるんとて怕れ。詐りて答て曰く。高定が手下の者なり。孔明聞けるべ高定は味方なり。忠ある者を尽く宥さんとて酒呑せ。引出物をらせ。送り回し。次に真の高定が手下の生取を。引出させ。汝ら雍闓の手下に属せるぞと。問に生捉ども。答て曰く。高定が手

曹丕廣陵を悉く敗軍す



曹丕と獻帝の文聘撮と徐晃その余の呉將の小卒し

張遼
徐晃


其二
于禁

乃ちこれを孔明に曰く。汝ホまとに高定が手下乃ちこれ。
べ中軍に入て。酒と飲として。尽く宥して。引出物とらせ。今日雍
闓。ひそかに使を送て。汝ホが主の高定と朱褒とが首を刎。
来れて。味方に降らんと。孔明に云ふ。高定が忠義を感
りとれば徒らに討れんかと憐むと。今汝ホと放して回らしむ。
うあらば。再び反くことあれ。若重て。生取べ決して。一人も放
さじといふて。尽く放しけるに。皆恩を謝して。本陣に回り。
高定を見て右の由を語り。雍闓ひそかに孔明に内通して。君
を殺さんと仕る。ならば。油断なきやうにいひけるに。高定
ん疑ひ。密に雍闓が陣へ人を遣して。その体を伺ひ。むるに。
罪の陣より。放されて回りたる士卒どもと。おのおのに相集

りて。孔明が徳を感称し。ことに高定が手れもの。と称らば
んべ一人も残らず。殺さるべしなど。物語しけるに。その人よく
く。陣中の拵を伺ひ回り来りて。高定に報ず。高定ん。の
内。安からず。又密に孔明が陣を忍ばせ。その拵を伺ふに。
途に。伏兵に生取れ。孔明が前に引出されぬ。孔明詐りて雍闓
が手下乃ちこれを。由を。陣中に招き入れて。かくて。汝が
主の雍闓。已に味方に降参せんと。ねがひ。高定朱褒が首
を取て。来らんと約せしが。何として遅く。汝ら回て。ものいふ
せとて。一通の書簡を渡しまゐらせ。大事の日間。雍闓に渡さんべ
しとて。酒など飲せて。回しけるに。その者いとき。本陣に回り。高定
に見て。右の趣きを。詳りて。孔明に云て。雍闓が兵をうと。思

ひ。昏黄に送らんとて。生しけるは。高定ひらきたる。早く二人が首を取て。味方に来らべ天子に奏して。重く用ひんと。昏く。雍闓に送る。昏黄にかりけるは。高定をとりて。大に怒り。おのれ上へ疑ふ事は。真の心をもつて交るべ雍闓。却て殺し。已が功名を備て。号に降らんと。巧むおれ何でその侯に。閣べきとて。急き鄂煥を呼へ。孔明は仁徳の人なり。ましてが謀反へ雍闓が勧に。今早く雍闓を殺して。孔明に降らざるべ。忽ち禍あへん。鄂煥が曰く。今陣中に酒宴して。殺けて。雍闓を招きまえ。おのれ別のんちくんで。坦然として。依び来らん。もし疑ひのんあらべ。敢て来らじ。そのとき。君を。がら推よせて攻めん。甚へ。ましぶ陣の後に伏て。忽ち生耳ん。

高定げんもとて。酒宴を設て。雍闓をまねきけるに。雍闓も。ん内深く疑ひをなして。居けるに。高定に託て来らざりけれべ。高定。されどおとして。手下の兵を揃て。その夜雍闓が陣へ攻入りけるに。さて孔明に扶けられたるものども。こを高定を慕へ。意ありけるべ時に乗じて。戦ひを助け内外より探だ。べ。雍闓俄のうへて。戦へべきやうなく。只一騎山路をさして。逃走り。二里ばかり来けるに。忽然として。一棒の鼓をあらし。一手の軍馬路をさへぎり。鄂煥戦をまへて討てとり。只一合に。雍闓を切て落し。首をとりて高定に渡しけるべ。高定大に。よろこび。首をもつて孔明に降る。孔明その首をとりてきたる武士をよび。高定を引出て。斬て弁よと。下知しけれべ。高定愕ひて

曰く某深く丞相の恩を感じ。今雍闓を誅して。来降る。何
ゆえ殺しのゆえで孔明冷笑して曰く。今汝が降参は詐なり。
汝の首も雍闓が首あらばこそ。兵を用ひて五十あまれり。
是ホの計を止めるべきや。高定が曰く。何故ゆえと疑ひ給ふ。
孔明とあへば匣の中より一封の書簡を出して曰く。汝が上とと
よ朱褒とぞ使てのりて降らんと称ひ高定は雍闓と固く生死
の交をむすびと云送るる。汝ちうんで軽〻〻雍闓を我
べきかとよりて兼ねてと志ふ朱褒が。高定が曰く。
反間の計なり。丞相うたがはるるぞ。信じ給ふ。孔明が曰く。
未だ汝が言を信ぜず。朱褒と。対決せざるんで。真偽たがはるる
ちがひと高定が曰く。丞相いと某を疑ひ給ふ。我が手下の
勢を率して。朱褒と生取来る。孔明が曰く。若しかくのごとくば。
汝の疑ひあらん。高定とあへば。鄂煥を伴ひ手下の勢
を引て。直ち朱褒が陣へ。おしよせければ朱褒も兵を引て陣を
出る。高定あれば何事ぞ。問ける。高定大
声にて曰く。汝いつるゆえ孔明が昏闇を送て反間の計を
なさんとする。朱褒が言て。夢にもしらざるなり。
答べき言なく目をやり働くを鄂煥馬をとばせて後より一
刀に斬て落す。高定大音あげて我に従へざるものへ尽く。
誅せんとよばりけるゆえ。諸軍その地上に拝伏す。高定蜀
の陣に回りて朱褒が首を献りけるゆえ孔明大に喜んで曰く。
御辺に功を立させんとを思ひ計を用ひて雍闓朱褒を

誅せしめたりとて。卒ゐ高定を益州の太守として。三郡をたゞ
べ守しむ。鄂煥を衙將ともさだべ永昌の郡をおのがうら
解く。太守王伉城を出て。びゝ入けるべ孔明城中へ入れさく民
を安んぜ

繪本通俗三國志六編卷之四終

192
74
28

繪本通俗三國志 六編 四

繪本通俗國史

巻之

東京圖書館
和書門 小說類
函 二六 架 七八 號 七五 冊
122
122
74
28